

提 言

分断でなく協力を！ ワクチンに願う

中野貴司（川崎医科大学 小児科学）

人類の大いなる脅威だった天然痘は、1977年10月にソマリアで発症した患者を最後に地球上から消滅した。患者発生を監視するサーベイランスを強化し、予防ワクチンである種痘を普及することで、私たちはひとつの病原体の封じ込めに歴史上初めて成功した。それまで発生していた天然痘が地球上から零になったことで、サーベイランスや検疫は不要となり、ワクチンの接種も必要がなくなった。すなわち、根絶達成は大きな費用対効果を生み出した。

医師になって4年足らずの頃から、西アフリカのガーナで2年間暮らした。ガーナの医療スタッフとチームを組んで村を定期的に巡回し、妊婦の体重や血圧を測り、5歳未満小児の身長/体重を測定し、スケジュールに従ってワクチンを接種し、発熱やマラリア、下痢症の簡単な治療を行うことが日常業務だった。そこでスタッフたちが最も頼りにしていたのは、WHOの出版物であった。栄養不良の診断法や食事指導、下痢に対する経口補水療法、予防接種の標準スケジュールなどが書いてあった。

これほど頼りにされるWHOとはどんな組織なのか、自分も見てみたいと思った。2年間の任期中に休暇制度があった。ヨーロッパで休息のついでにジュネーブの本部を訪問してみようと考えた。当時は電子メールもなく、航空郵便で下手な英語の手紙を書いたところ、見学させてもらえると1日のスケジュールが送られてきた。寛容に門戸を開いている組織だと、少し嬉しくなった。

現在のWHO本部に会議で訪れると、事前登録や入館時の手続きなど結構手間を要するが、当時はフリーパスで玄関から入ることができた。受付を過ぎてロビーに進むと、「天然痘根絶達成」のパネルが掲示されていた。私の訪問は1987年、すでに根絶宣言から年数を経過していたが、ワクチンの普及でこんなことができたんだと思った。そういえば、自分がガーナで巡回している村には、国内で多数発生していた麻疹やポリオの患者がほとんどいなかった。医師になりたての頃、「予防」にあまり興味はなく、重い病気を治せる「治療」に華があると思っていたが、ワクチンの効果を再認識した。

天然痘に次ぐ根絶のターゲットはポリオだが、ゴールはまだ見えない。生ワクチン株の変異による病原性復帰と、世界各地の紛争がポリオ対策の妨げとなっている。ポリオ対策従事者に危害が加えられたという悲しい現実もある。また、COVID-19パンデミックにより、ワクチンは皆にとってより身近な存在となったが、安全性への懸念をはじめとするさまざまな議論は、しばしば人々を分断する原因になっている。ワクチンが開発された目的は、そうではなかったはずである。

2023年3月17日、根絶達成時のWHO天然痘対策本部長だった蟻田功先生が96歳で永眠された。国際舞台で、正しいことを物申せる稀有な偉人であった。蟻田先生の著書に「(根絶の成功は)人類は、政治、宗教、人種を越えてその英知を集合して、共同の敵に当たることができる、ということを証明した」とある。ワクチンは人々を分断する材料でなく、健康という一つの目的を目指して協力できる手段であってほしい。





写真 1 ガーナの村でポリオ生ワクチン投与（1987 年）